

生涯スポーツを指向した正課体育の教育方法 の改善に関する調査研究プロジェクト — プログラム階層に対する教育方法の検討 —

山川岩之助, 寄金義紀, 大木昭一郎, 小原 晃, 西藤宏司, 本間 崇,
萩原武久, 倉木常夫, 田崎健太郎, 功力靖雄, 阿江通良, 進藤正雄,
田崎洋佑, 小俣幸嗣, 河村レイ子, 中村和彦*, 高木英樹

I. 緒 言

われわれは、スポーツの生活化を指向して正課体育の教育方法を検討してきている。本プロジェクトでは、昭和59年、60年において、特にスポーツ・運動に消極的なStay階層に対する教育方法を模索するため、調査研究を行った結果、Stay階層の実態が明らかになり、その教育方法の改善に有効な手がかりを把握することができた。そこで、本年はスポーツ・デーなど学内のプログラムに参加するProgram階層の運動生活や身体的条件（体力・運動技能等）の実態を捕らえると共に、正課体育の授業がプログラム参加に及ぼす影響を明らかにし、Program階層に対する教育方法の検討を目指すこととした。

本学においてスポーツ・デーが行われてから11年が経過し、教育的プログラムの成果をあげつつ学生の間に充分定着してきた現時点において、スポーツ・デーの役割を再検討すると同時に、プログラム参加への動機づけの機能を有する正課体育の教育方法のあり方を研究する意義は大きいと考える。また一方では、スポーツ・デーに関する、開催種目や運営に関しての問題点も提唱されている。そこで本プロジェクトでは本学学生を対象としてスポーツ・デーに関する調査を行なった。

II. 調査方法

1. 調査項目

調査は以下の9項目について行なった。1) スポーツ・デーへの参加・不参加、2) スポーツ・デーで参加した種目、3) スポーツデーに参加した理由と動機、満足度及び問題点、4) スポーツ・デーに参加しなかった理由、5) 成果体育での履修種目、6) 日常生活でのスポーツ活動、7) 運動頻度、8) スポーツ・デー以外の運動プログラムへの参加9) スポーツ・デーに関する希望

図1に今回の調査における項目の構成図を示した。

2. 調査の実施

調査は本学の共通科目「体育」の受講生（体育専門学群生は除く）を対象として、昭和63年11月1日から1週間にわたって正課体育授業中に、アンケート記入法によって調査を行なった。調査は、体育センター所属の各教官が授業中にアンケート用紙を配布し、授業終了時に回収した。サンプル数は4152件で、有効回答率は97.6%であった。

III. 結果及び考察

1. スポーツ・デー参加の実態

* 山梨大学教育学部

スポーツデー参加に関する調査の構成

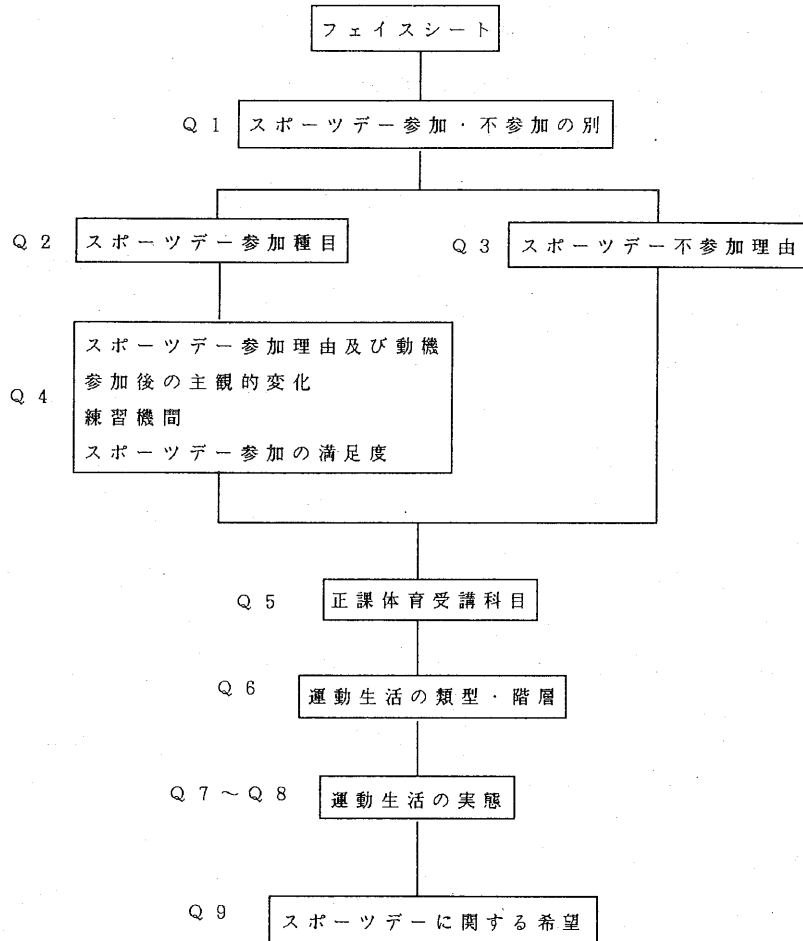


図 1

1) スポーツデー参加者数

調査の結果スポーツデーに参加した学生は全体の36.4%に当たる1506名であった。一方不参加者は全体の63.6%に当たる2637名であった。図2にスポーツ・デーに参加した学生を性別、学年、年齢、学類（正課体育受講区分による）によって分類し、各々の構成割合を示した。参加者は、男女別では男子が74.3%を占め、学年別では1年生が47.3%、年齢別では19歳が34.1%、学類別では自然系が37.6%を占めていた。

2) 男女別

性別による参加割合を図3に示した。

男女別では男子の参加率が39.5%、一方女子の参加率は29.6%と男子の参加率の方が高かった。性別で参加率を比較するとやや男子の方が積極的に運動プログラムに参加しているようである。その一方で、女子の参加しやすい種目を開催することを考える必要があると思われる。

3) 学年別

学年別の参加率を図4に示した。その結果、1年生の参加率が高く（61.4%）学年が進むに連れて参加率が低下する傾向にある。学年の進級に伴う運動プログラム参加の阻害要因を推察すると、専攻科目の決定などにより、

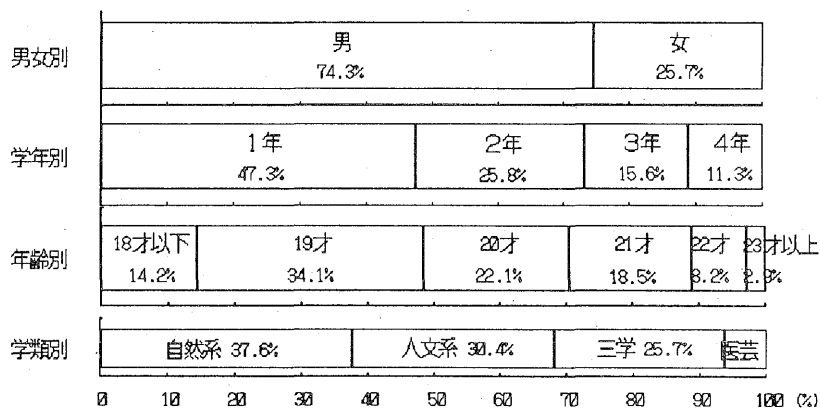


図 2

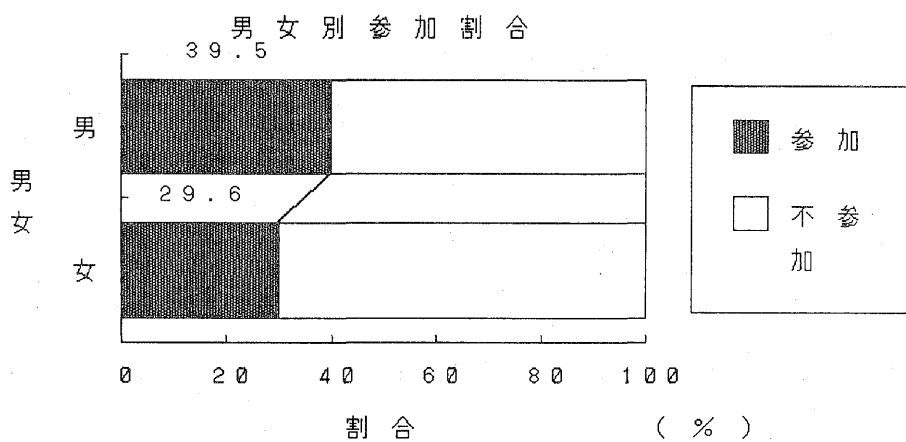


図 3

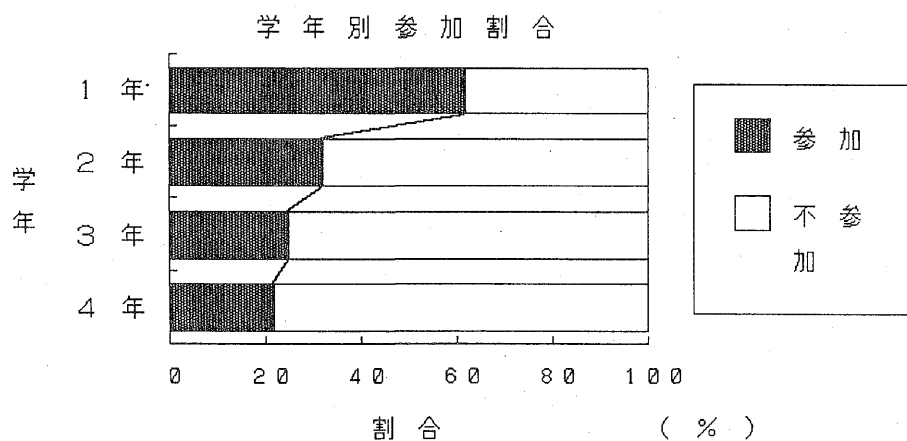


図 4

学生の自由裁量時間が減少するなどが考えられる。しかしながら、今後スポーツ・デーの参加者層を拡大するためには、高学年の学生に対する運動プログラム参加への意識改革を行なう必要があると思われる。

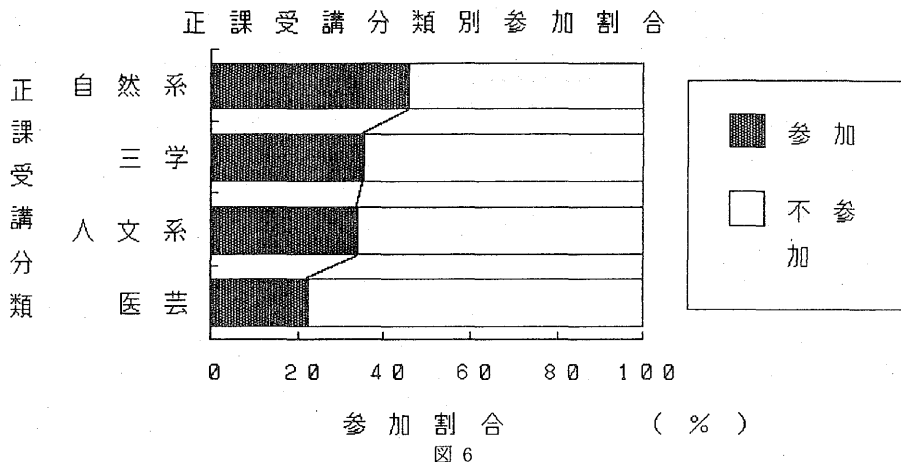
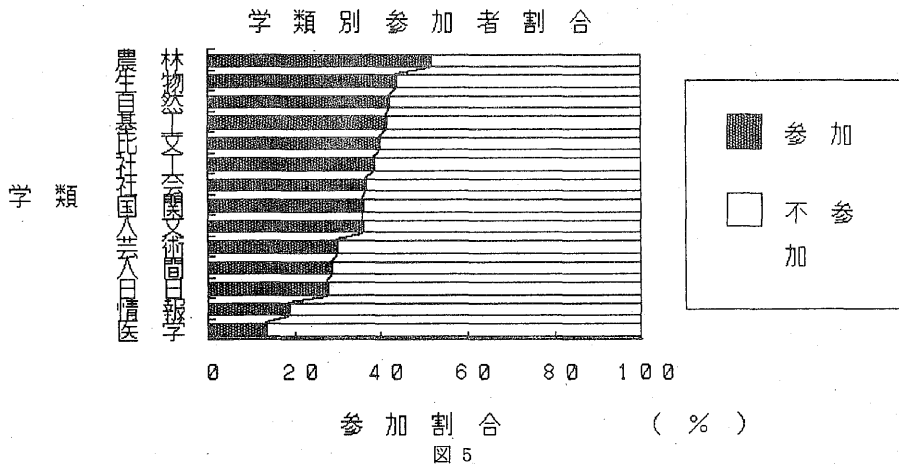
4) 学類別

学類別にみると最も参加者数が多かったのは自然学類（254名）で参加者全体の16.9%を占め、ついで農林学類（205名）の13.6%、基礎工学類（198名）13.1%の順であった。しかし、各学類の構成人員が異なるため、各学類の調査人数に対する参加者の比率を求め、図5に各学類ごとの参加割合を示した。その結果、農林学類が51.6%と最も高く、ついで

生物学類（43.6%）、自然学類（42.0%）の順でいずれも自然系の学類が上位を占め、参加比率の低かった学類は医学で、わずかに13.3%であった。

5) 共通体育履修グループ別

学類を次のように、正課体育を履修する際の4つのグループに分類し、(1)自然系(自然、生物、農林)、(2)人文系(人文、社会、比文、人間、日日)、(3)第3学群(社工、情報、基礎工、国関)、(4)医学・芸術、各グループ毎の参加率を図6に示した。その結果、参加者の全体に対する比率は自然系が最も高く45.4%であった。次に第3学群と人文系が続き医学・芸術は22.2%と参加率が低かった。



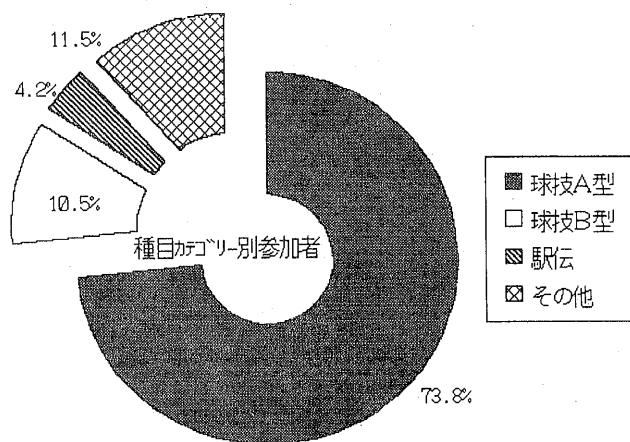
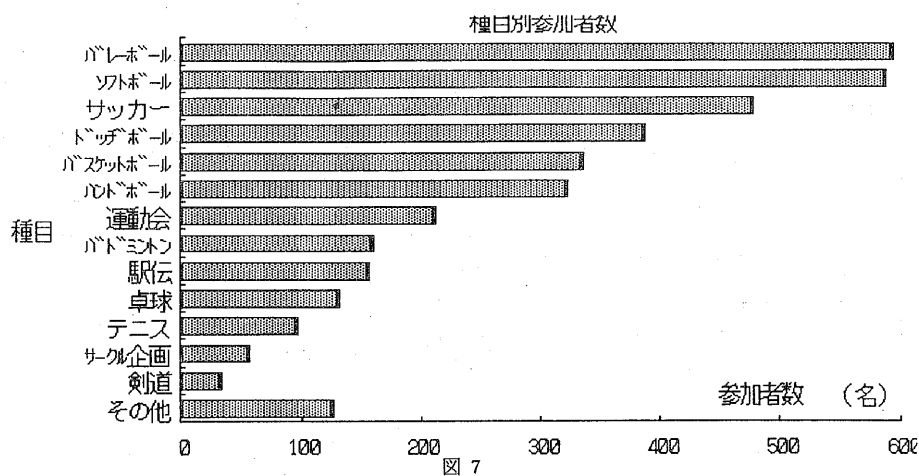
6) 種目毎の参加人員

種目ごとの参加人員を図7に示した。開催種目の中で最も参加人員が多かったのはバレーボールで591名、続いてソフトボール(584名)、サッカー(475名)といずれも集団型球技が上位を占めた。また各種目の参加延べ人数は3645名となり、平均すると1人約2.4種目参加していることになり、スポーツデー実行委員会が発表している参加人員についても、開催種目の参加人員の延べ人数であるので、実際に参加している実数は少なくなるものと思われる。

スポーツ・デー実行委員会の発表では、延

べ参加者数は、春のスポーツ・デーが7536名、秋のスポーツ・デーが6623名、年間合計で14159名であるとしているが、今回の調査結果から類推すると実際の参加者数は、約5900名余りであると思われる。

次に開催種目を次の観点から4つのカテゴリーに分類した。1) 球技A型：集団で行う球技(バレーボール、サッカー、ハンドボールなど)、2) 球技B型：ラケット型球技(テニス、卓球など)、3) 駅伝、4) その他、以上のカテゴリー分類による参加者数の割合を図8に示した。結果は球技A型が非常に多く、全体の73.8%を占め、集団型球技の人気の高さが伺われる。



2. スポーツ・デー参加者の感想

スポーツデー参加者に対して、参加の理由・参加の動機、および不参加の理由が調査した。さらに、参加者について参加後の変化、参加のための練習、満足度、参加に際しての問題点、およびスポーツデー以外の運動プログラムへの参加状況を調査した。

1) 参加理由・参加動機・不参加理由

スポーツ・デー参加理由の主なものを図9に示した。参加理由として第1位にあげられ

たものは、スポーツが好きだからで、参加者全体の33.0%にあたる494名であった。次いで交友関係を広げるため25.0%、気晴らしのため21.4%であった。

次に主な参加動機を図10に示した。参加の動機としては、友達に誘われてが全体の51.9%にあたる776名が第1位、ついで自分から進んで31.3%、代表に選ばれて7.3%、中・高時代の経験種目5.1%、その他4.4%であった。

不参加理由としては、他の活動と重なったが、不参加者全体の22.0%であった。ついで

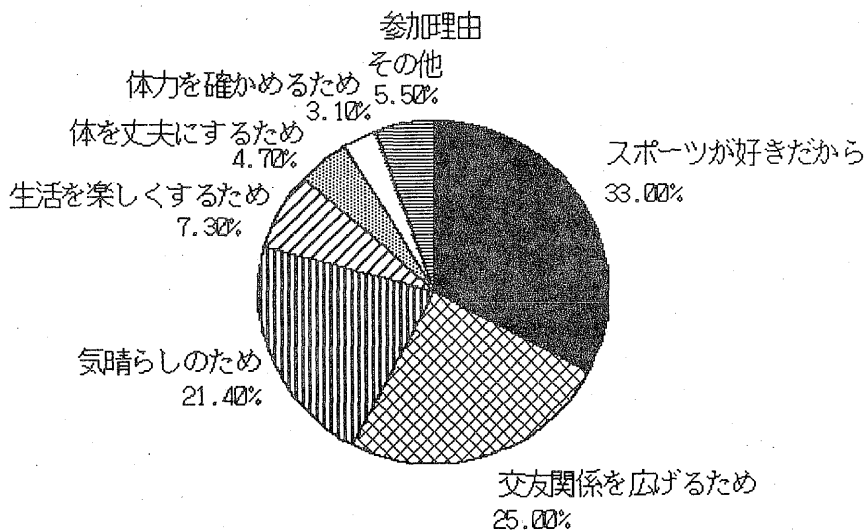


図 9

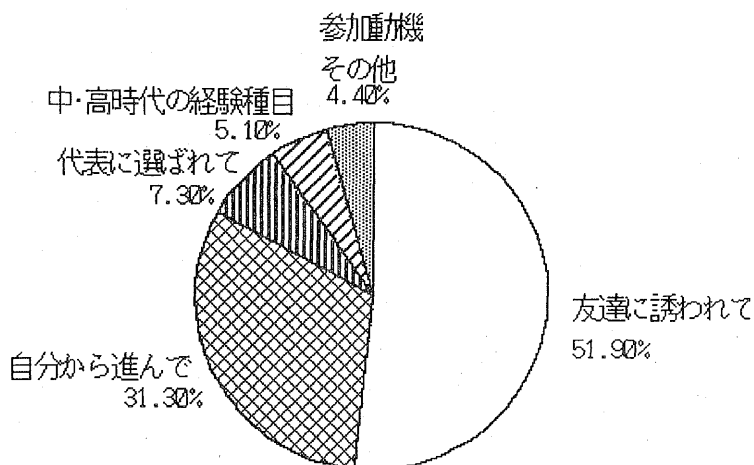


図 10

希望種目がなかった15.2%，参加する仲間がいなかった12.0%と続いている。また、参加してもつまらない7.6%，スポーツデーについてよく知らない4.2%であった。このことは、スポーツ・デーに対する認識の低さや、プログラムの問題を表わしているものと思われる。

2) スポーツ・デー参加後の変化

スポーツ・デー参加後の変化を図12に示した。スポーツデー参加者の参加後にどのような

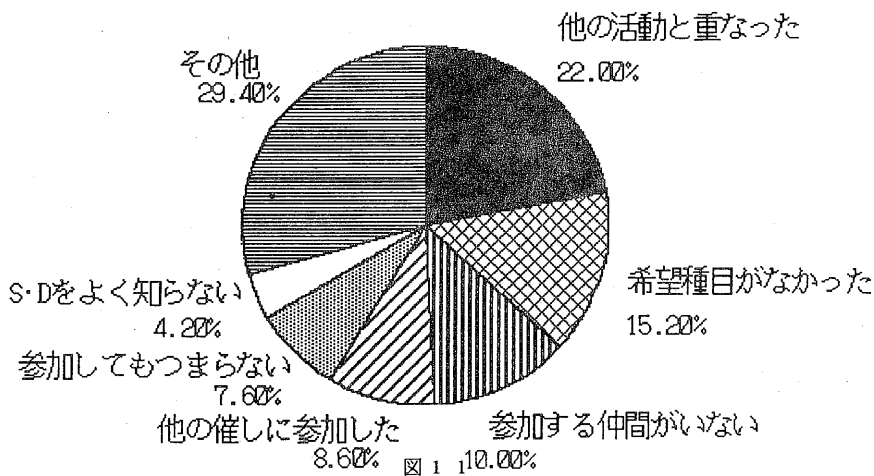
変化があったかという問いに対しては、第1位が、交友関係の広がり33.0%，次いでスポーツの楽しさに対する認識18.9%，自己の体力についての認識13.8%で、この3つの答えて、全体の65.7%を占めた。

参加の動機でも理解されるように、スポーツを通したコミュニケーションの手段としてのスポーツデーのニーズが伺われる。

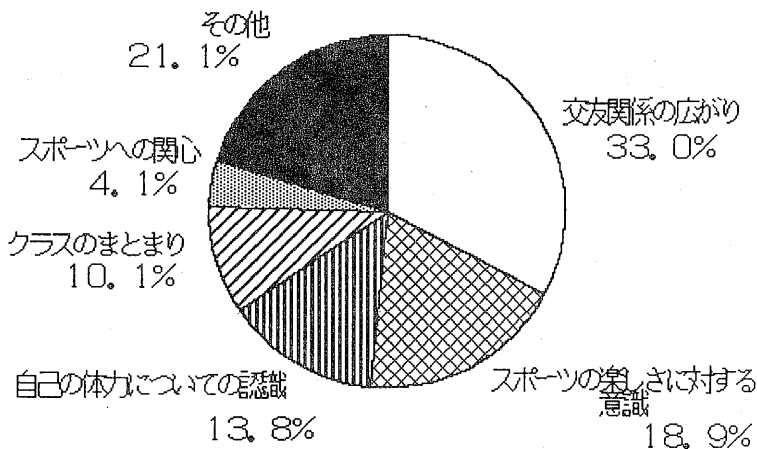
3) スポーツ・デー参加のための練習

スポーツデー参加のために、特別に練習を

不参加理由



スポーツ・デー参加後の変化



しなかったが58.6%で最も多く、ついで2～3日前から16.9%、日頃から練習しているの
で特別練習しなかった12.8%であった。

4) スポーツ・デーに対する満足度

スポーツデーの参加者の満足度は、やや満足が33.0%で最も多く、ついで普通が30.3%であった。全体の48.5%が満足と答えている。それに対して、21.2%が不満または、非常に不満と答えている。

5) スポーツ・デー参加に際しての問題点

スポーツ・デー参加に際しての問題点を図

14に示した。スポーツ・デー参加に際して、問題となったことはなんですかの問いに対して、特になしと答えたものが、36.1%で最も多く、問題点としては、メンバーの不足18.8%、練習不足15.2%、時間の余裕9.3%、練習のための用具施設の問題5.8%と続いている。不参加理由のなかでも3番目に「参加する仲間がいない」があげられていたが、本人が運動欲求を持っていたとしても、一緒に運動をする仲間がいないという実態が伺えた。

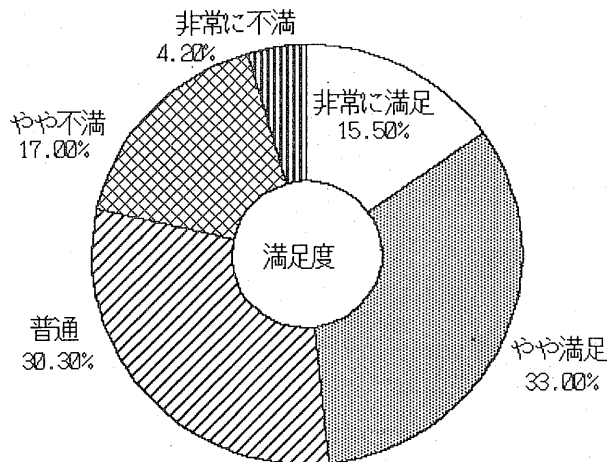


図 1 3

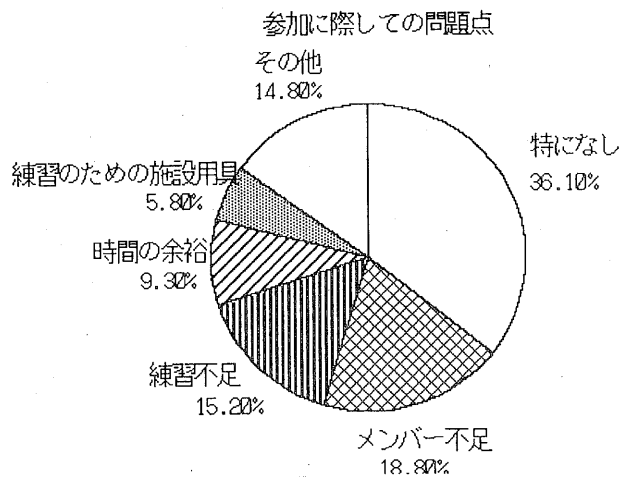


図 1 4

6) スポーツ・デー以外のスポーツプログラムへの参加

スポーツ・デー以外の運動プログラムへの参加については、学類運動会が51.9%で最も多く、ついで朝野球6.9%、学園マラソン5.2%の順であった。

学類運動会への参加が、51.9%と高値を示したことは、注目に値する。

3. 学生の運動生活について

今回の調査では、スポーツデー参加者と不参加者を比較し、運動生活の違いを明らかにするため、運動生活の類型化を行い、さらに

正課体育履修状況により履修グループ別に運動生活の違いを分析した。

1) 学生全体からみた運動生活

学生の日常の運動生活の実態を図16に示した。学生全体からみた運動生活は、クラブや同好会に所属して活動しているクラブ階層が21.6%、クラブに所属しかつ自由時間に自分なりに運動を楽しんでいるクラブ・エリア階層が18.6%、自由時間に運動を楽しんでいるエリア階層が21.7%、特に運動を習慣的に行っていないステイ階層が38.1%となっており、ステイ階層が最も多かった。

S・D以外のスポーツプログラム

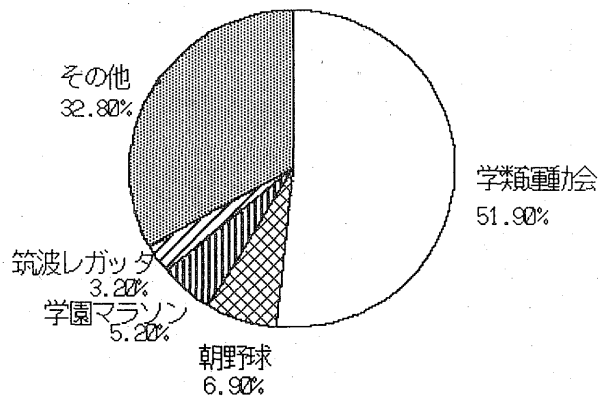


図 1 5

運動生活

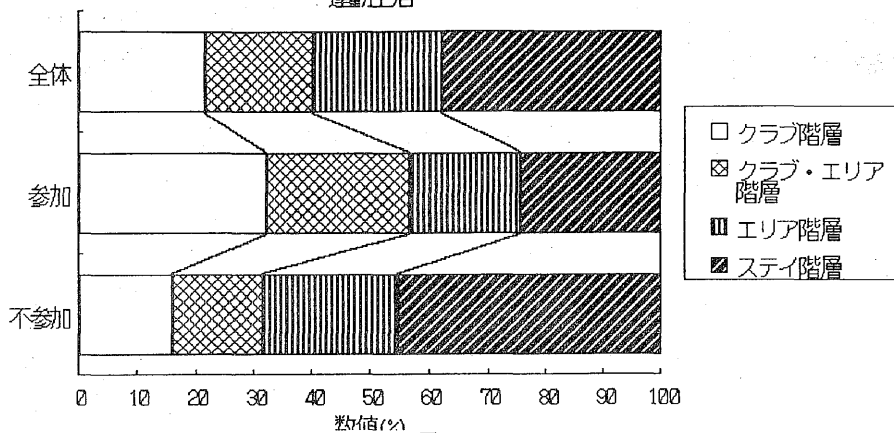


図 1 6

2) スポーツ・デー参加者と不参加者でみた運動生活

スポーツ・デーの参加者では、クラブ階層が最も多く32.1%で、クラブ・エリア階層が24.4%で、クラブ階層とクラブ・エリア階層と合わせると55.5%で、スポーツ・デー参加者は、かなり運動習慣が高いことが伺える。

一方、不参加者では、ステイ階層が45.7%と最も多く運動習慣のない学生が多いことがわかった。

3) 正課体育履修グループ別にみた運動生活

履修グループ別に学生の運動生活をみると、クラブ階層は、自然系と医学芸術系が多く（それぞれ23.5%，23.8%），人文系が19.7%と少ない傾向にあった。

クラブ・エリア階層は、医・芸が多く21.3%，ついで第3学群の19.7%であった。

一方、ステイ階層は、人文系が最も多く42.9%であった。このことは、スポーツ・デー参加者の構成などからも伺えるように人文系の学生の運動の日常化への関心が薄いと思われる。

4) 正課体育履修グループ別にみた運動生活とスポーツ・デー（プログラム）への参加

正課体育履修グループ別にみた運動生活の実態を図18に示した。

①医学・芸術系の場合

医学・芸術系では、参加者と不参加者でクラブ階層（それぞれ23.5%，24.1%）には大きな差はみられないが、参加者では、クラブ・

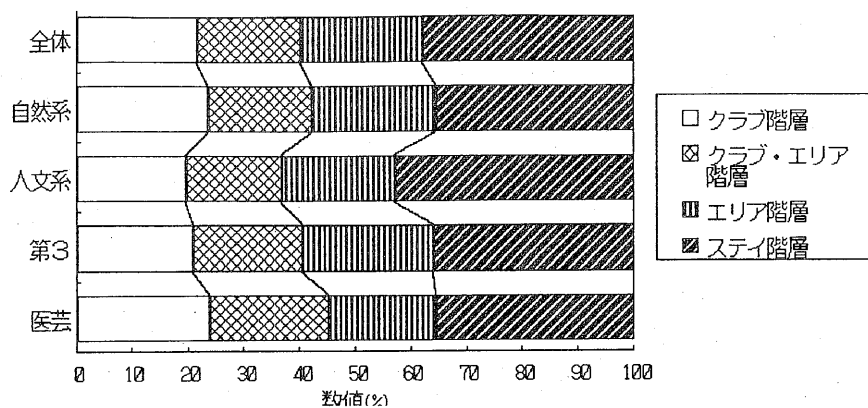


図 1 7

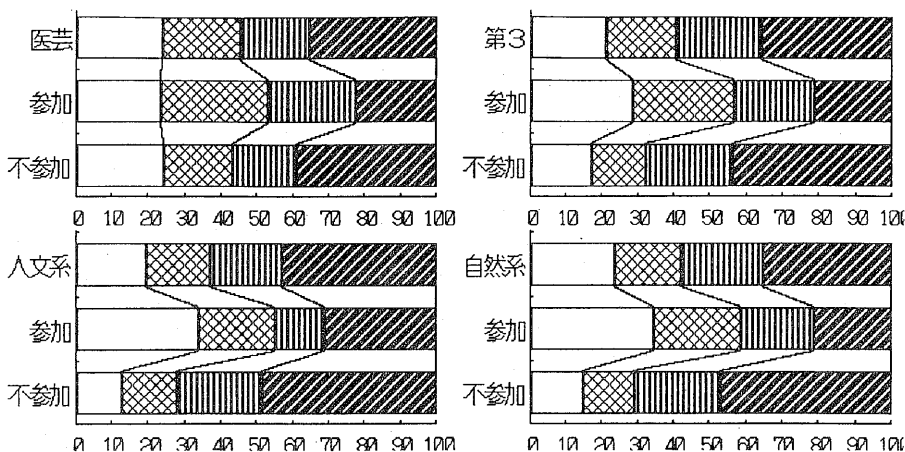


図 1 8

エリア階層が29.4%と多く、また、不参加者では、ステイ階層が39.2%と多い傾向がみられた。

②第3学群の場合

第3学群では、参加者と不参加者で比べるとクラブ階層（それぞれ28.7%, 17.0%）、クラブ・エリア階層（それぞれ27.9%, 15.0%）でかなりの差がみられた、また、不参加者では、ステイ階層が43.6%と多い傾向がみられた。

③人文系の場合

人文系では、参加者と不参加者で最も大きな差がみられた。クラブ階層は、それぞれ33.9%, 12.7%であった。同様にステイ階層にも差がみられ、人文系不参加者のステイ階層が48.7%で、正課体育履修別でみた4つのカテゴリーの中で最も多かった。

④自然系の場合

自然系も、ほぼ人文系と同じ傾向がみられた。

⑤全体的にみた場合

全体的にみてみると、スポーツ・デー参加者は、不参加者に比べて日頃から運動習慣を持つ傾向にあり、参加者と不参加者の差が人文系、自然系で大きいことがわかった。また、不参加者においてはステイ階層の割合が、4つのカテゴリーの全てにおいて、39%を越えて高い割合を示した。

5) 運動頻度とスポーツ・デー参加状況

全体でみると、1週間に1・2回の割合で運動を行なっているものが最も多く55.3%であった。参加者と不参加者を比べると参加者においては毎日、および2・3日に1回の割合で運動しているものの割合多く、逆に不参加者においては1週間に1・2回の割合で運動を行なっているものの割合が多い傾向にある。1ヶ月に1・2回、3・4ヶ月に1・2回、および1年に1・2回の割合で運動しているものの割合は、全体、参加者、および不参加者であまり変化がみられなかった。

4. スポーツ・デー開催に関する希望

1) 年間の開催回数

年間開催回数については、「現行のままでよい」が7割を越え、「もっと多くすべきである」が2割を越えた。参加と不参加別にみると、不参加者(78.4%)より参加者(72.0%)のほうが年間開催回数の現状を肯定的な割合が少なく、参加者(26.0%)のほうが年間開催回数を多くすることを希望していた。「もっと少なくともよい」について、参加者と不参加者の答えはほぼ同率で、1%台である。

2) 開催期間

開催期間については、現在年間に2日づつ2回であるが、「現行のままでよい」が約6割で、「もっと長くすべきである」が3割強

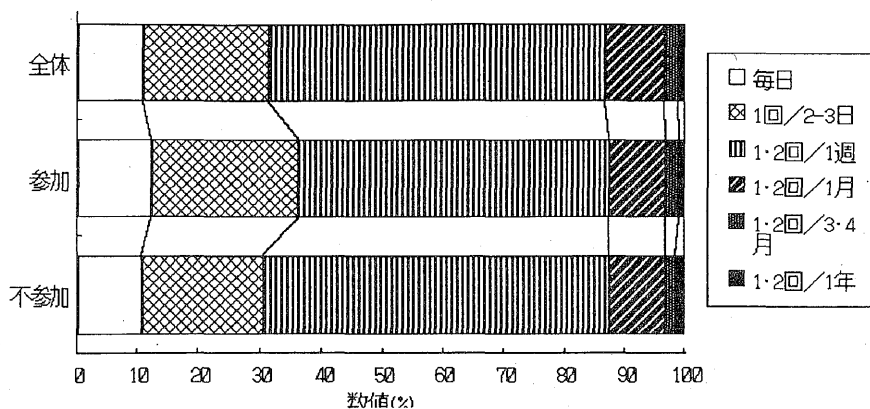


図 1 9

であった。不参加者（63.4%）より参加者（58.5%）のほうが開催期間の現状を肯定する割合が少なく、不参加者（34.8%）より参加者（40.1%）のほうが年間開催回数を多くすることを希望していた。「短くてもよい」の答えは参加・不参加者共大変低い割合で0.9%であった。

3) 開催種目

開催種目について、現在行われている種目は、1988年春のスポーツ・デーでは4種目2企画、秋のスポーツ・デーでは6種目1企画が行われたが、「現行のままでよい」が6割（参加者と不参加者がそれぞれ66.6%と61.9%である）を越え、「もっと多くすべきである」が3割を越えた。参加者（29.9%）より不参加者（34.9%）のほうが開催種目を増やすことを希望している。よって、不参加者がスポーツ・デーに参加しなかった一つの理由も適当な種目がなかったことが考えられる。「もっと少なくともよい」の答えは参加者と不参加者のそれぞれ2.3%と0.1%の低い割合であった。

4) 開催内容に対する希望

開催種目についての質問に、「もっと多くすべきである」と答えた人に、次の選択の中から順に3つを選んでもらうこととし、○専門家（選手・コーチ）等によるワンポイントアドバイス ○表彰制度の充実（メダルの授与等） ○有名チーム・個人によるエキビジションゲーム・競技会 ○有名スポーツ選手による講演会 ○他大学との交流試合（上位

レベル大会） ○学類・学群単位の対抗試合 ○その他 の7つが設定された。順位の1位から3位を通して、「学類・学群単位の対抗試合」がそれぞれ25.3%、21.0%および24.3%と最も高い割合を占め、それに続き「有名チーム・個人によるエキビジションゲーム・競技会」がそれぞれ20.4%、20.8%および17.8%となっている。そのほか、表彰制度の充実、他大学との交流試合および専門家等によるアドバイスなども強く要望されているようである。有名選手の講演については、約10%程度であった。

以上の結果から、参加者と不参加者の双方とも現行のスポーツ・デーの年間開催回数、開催期間および開催種目などの現状について、肯定的な意見をもっている。また、年間開催回数、開催種目を増やし、開催期間を長くすることを希望しているのが2割から4割に達している。逆に、それらを減らす意見がいずれ2%以下の極少数である。

スポーツ・デーと同時開催を希望するイベントは、学類の交流試合がトップで、その次が有名チーム・個人によるエキビジションゲーム・競技会である。

Ⅲ. まとめ

スポーツ・デー参加層が、どんな理由や動機に動かされ、どれくらい練習をし、参加後のどのような効果を感じているのかなどのプロセスを図20に示した。

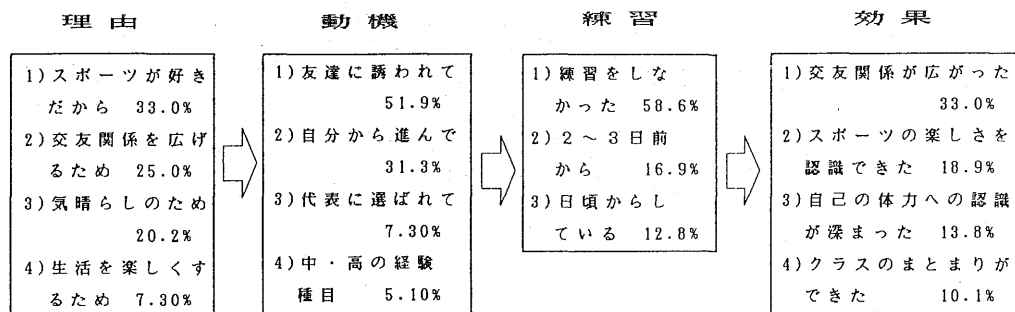


図 2 0

プログラム参加の主な理由は、スポーツが好きだから、交友関係を広げるため、気晴らしのためなどであった。

また参加の動機としてあげられるのは、友達に誘われて、代表に選ばれて仕方なくなど、他からの働きかけに追従するものと、自ら進んで参加するなど内発的なものがみられた。

しかし、正課体育の授業での学習経験が動機づけとなって、スポーツ・デーに参加した学生は非常に少なく全体の0.3%にしか過ぎない。このことは正課体育が目指しているスポーツの生活化について、プログラム階層に対しては有効な動機づけを行えていないといえる。よって今後は正課体育の授業での学習成果をスポーツ・デーなど種々運動プログラムで発揮できるような授業内容と指導を検討

する必要があると思われる。

学生の運動生活について、スポーツ・デー参加者においては、クラブ階層やクラブ・エリア階層が多く、日頃からクラブや同好会に所属したり、自由時間に習慣的に運動しているものが多くみられた。

また学類ごとで運動生活の実態を比較すると、自然系学類の学生の方が人文系学類の学生より積極的にスポーツに関与している姿がうかがえる。正課体育では履修する際に学類を4つのグループに分け（自然系、人文系、第三学類、医芸）て履修させているが、その各履修グループ間でも運動生活の実態にかなりの差異がみられた。このことは今後のカリキュラム編成の際にも考慮すべき問題であろう。